

太子町文化財資料 第31集

うちやまど

内山戸古墳群確認調査

—太子竜野バイパス建設に伴う埋蔵文化財確認調査—



1992年11月

太子町教育委員会

例言

- 1 本書は兵庫県揖保郡太子町上太田字内山戸に所在する内山戸古墳群の確認調査概要報告書である。
- 2 調査は太子竜野バイパス建設に伴い、平成4年9月14日から10月31日にかけて実施したものである。
- 3 調査は太子町教育委員会が主体となり、同社会教育課三村修次・海野浩幸が担当した。
- 4 調査・整理作業にあたっては、太子町シルバー人材センター、喜多村測量株式会社、岩村千穂、小山真紀各氏の協力を得た。
- 5 遺構の実測・トレースは喜多村測量株式会社、海野浩幸が行ない、遺物の実測・トレースは小山真紀が行なった。
- 6 本書の執筆・編集は、田村三千夫、海野浩幸が担当した。

本文目次

例言

調査に至経過	1	出土遺物	2
調査の概要	1	まとめ	3
古墳の概要	2		

図板目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 遺物実測図	3
第3図 確認調査トレンチ配置図	4
第4図 古墳部分地形測量図及トレンチ配置図	5
第5図 トレンチ土層断面図	6

写真

内山戸古墳群確認調査

1 遺跡の所在地
兵庫県揖保郡太子町上太田字内山戸488

2 調査主体者
太子町教育委員会

3 調査担当者
三村修次 海野浩幸

4 調査期間
平成4年9月14日～10月31日

5 調査面積
1080㎡

6 記録作成
地形図(1/100, 1/500)・遺構平面図(1/10)・断面図(1/10) 遺物実測図(1/1)
写真(モノクローム35mm・カラー35mm・カラーリバーサル35mm)



第1図 調査地位置図 (S=1/25,000「龍野」)

7 調査に至る経過

兵庫県教育委員会により平成4年5月1日から7月31日にかけて実施された国道29号線姫路西バイパス建設に伴う埋蔵文化財確認調査の結果、分布調査時点で認められた古墳状隆起は小型の横穴式石室を主体部に持つ直径約6.0mの古墳であることが確認された。また、周辺にもいくつかの古墳状隆起が認められることが指摘された。

太子町教育委員会では県教育委員会及、建設省近畿地方建設局と協議のうえ、調査結果に基づいて古墳の実数を把握するため更に広範囲の確認調査を実施することにした。

8 調査の概要

調査は県教育委員会の確認調査時点より伸びた草木の伐開から始め、地形測量終了後バイパス路線基準線に直交する形で、古墳状隆起の認められる場所については5m間隔に、他の場所については10m間隔にトレンチを設定して実施した。トレンチは随時拡張、増設するものとし、調査終了時点では30本のトレンチ調査となった。

調査の結果、県教育委員会により確認された古墳の上方において、新たに2基の小型の横穴式石室を主体部に持つ古墳が確認された。仮に下から順に1号墳、2号墳、3号墳と呼ぶことにした。

古墳確認地点から約15m北の尾根筋を境にした西北向き斜面に設定したトレンチでは、表土直下で地山岩盤層に達する所が多く、古墳等の遺構は確認されなかった。また、地形測量で認められた里道添いの古墳状隆起は、すぐ西側のひょうたん池の浚渫土による盛土であることが明らかになった。この盛土は特に里道西側に広範囲に認められ、厚い所で1.

0m以上を測る所もあり、昭和初年まで4年に一度ずつ浚渫が行なわれていたとのことである。

9 古墳の概要

1号墳

県教育委員会により確認されたものである。幅約0.50m、長さ約2.00m(何れも内法)を測る礎床を持つ横穴式石室を主体部に持つ、径約6.00mの古墳である。山側斜面には溝が巡らされており、北側と西側には一部外区列石様の石列が認められる。石室内及、墳丘崩壊土内より土師器片と7世紀前半の須恵器片が出土した。

『一般国道29号姫路西バイパス建設に伴う発掘調査実績報告書』

2号墳

今回の調査で確認された古墳である。1号墳の直上に位置する。幅約0.45m、長さ約1.70m(何れも内法)を測る横穴式石室を主体部に持つ、径約5.00mの古墳である。1号墳同様山側斜面に溝を巡らせている。この溝内より6世紀末から7世紀前半の須恵器坏蓋と壺の胴部と考えられる破片が出土した。

3号墳

今回の調査で確認された古墳である。1号墳の右上方で、3墳中最上方に位置する。幅約0.55m、長さ約3.20m(何れも内法)を測る横穴式石室を主体部に持つ、径約7.00mの古墳である。これも先の2墳同様に山側斜面に溝を巡らせている。3墳中一番大きな古墳である。石室内埋土より7世紀中頃の須恵器片が出土した。

10 出土遺物

2号墳、3号墳からは須恵器片、浚渫盛土中からは須恵器片、土師器片、備前焼鉢片、近世陶磁器片等が出土した。

須恵器坏蓋(第2図 1) T-11で検出された2号墳周溝から出土した。口径10.60cm、器高3.50cmを測る。口縁部は丸く、天井部は比較的平である。調整は外面はヨコナデが施され、天井部は左回りのヘラ削り未調整である。内面はヨコナデが施されている。内外面とも明灰色を呈し、胎土には1mm大の白色砂粒を含む。焼成は良好である。

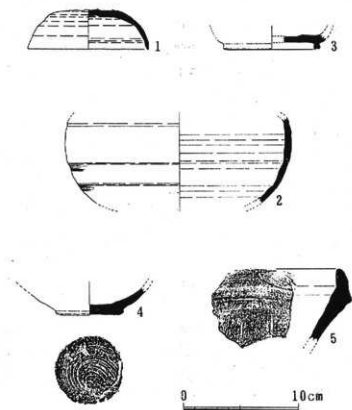
須恵器壺胴部片(第2図 2) 脚付長頸壺の胴部の破片と考えられる。2号墳周溝から出土した。復元胴部径20.0cmを測り、破片上部に浅い沈線が巡る。調整は外面上半部はヨコナデ、下半部はヘラ削りが施されている。内外面とも明灰色を呈し、胎土には1~3mm大の白色砂粒を含む。焼成は堅緻である。

須恵器坏(第2図 3) 貼付け高台をもつ坏の底部の破片である。3号墳石室埋土上層から出土した。高台径8.6cm、同部高さ0.5cmを測る。高台部の作りはしっかりしており、端部はわずかに凹みをもつ。調整は外面は底部はヘラ削り、体部はヨコナデが施されている。内面はヨコナデが施されている。内外面とも淡茶灰色を呈し、胎土にはわずかに

砂粒を含む。焼成は良好である。

須恵器碗（第2図 4） 糸切底の平高台をもつ碗の底部である。池浚深盛土から出土した。高台径6.0cmを測る。高台部はあまり突出しない。調整は内外面ともヨコナデが施されている。外面はやや青みがかった灰色、内面は明灰色を呈し、胎土には3~5mm大の小石を含む。焼成は良好である。

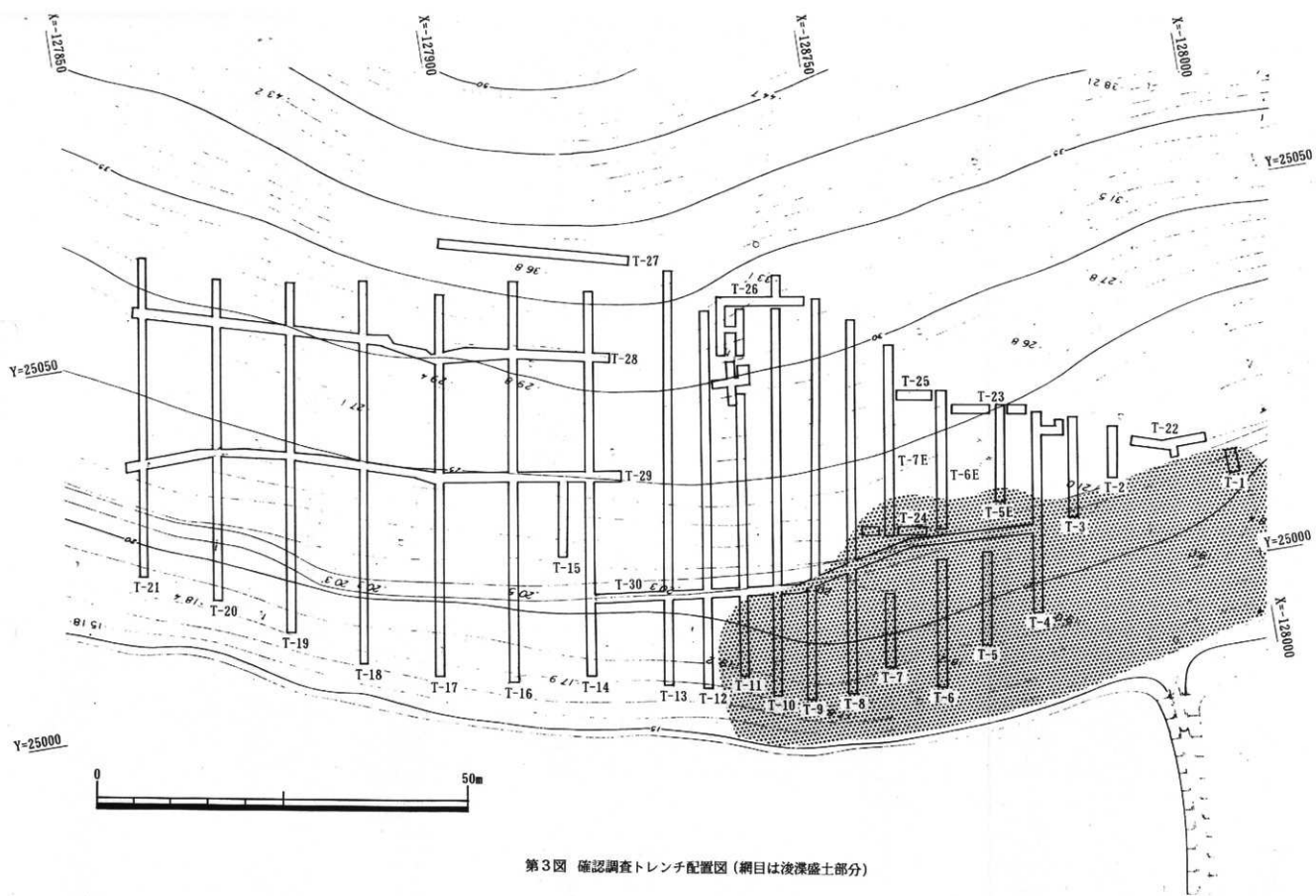
備前焼播鉢（第2図 5） 池浚深盛土から出土した。口縁部は上方へ立上がり、内面はわずかに凹む。口縁端部近くまで櫛描条線がかすかに認められる。外面は暗紫褐色を呈し、口縁部には淡黄色の自然袖葉がかかる。内面は暗褐灰色を呈する。胎土には3~5mm大の小石を含む。焼成は堅緻である。



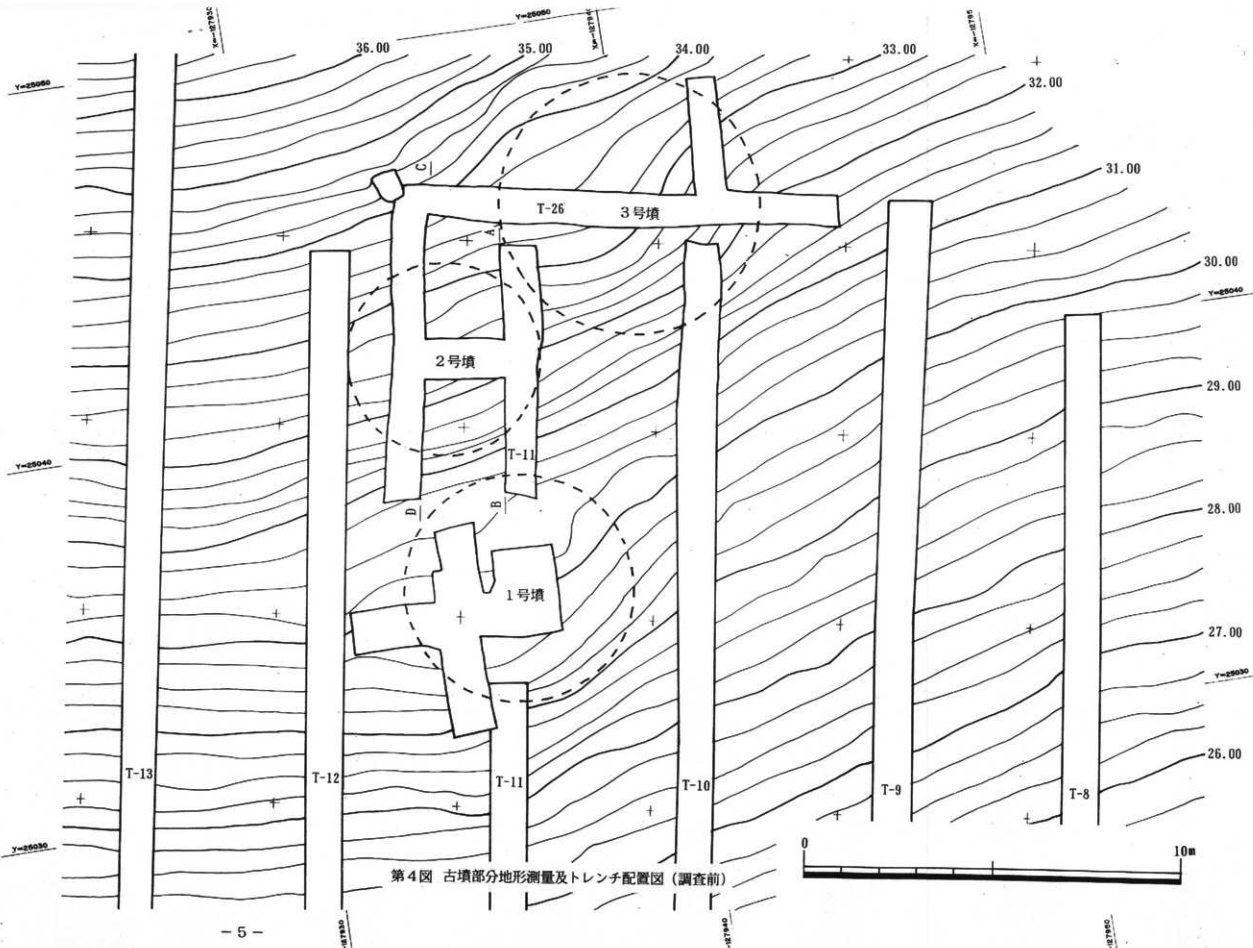
第2図 出土遺物実測図

11 まとめ

今回の調査で、合計3基の古墳が確認された。何れも天井石等を失っているが、終末期の小型化した横穴式石室を主体部を持つものである。古墳の時期については、出土遺物から6世紀末から7世紀中頃と考えられるが、墳形とともに、より正確な時期については後の調査を待ちたい。



第3図 確認調査トレンチ配置図(網目は浅深盛土部分)

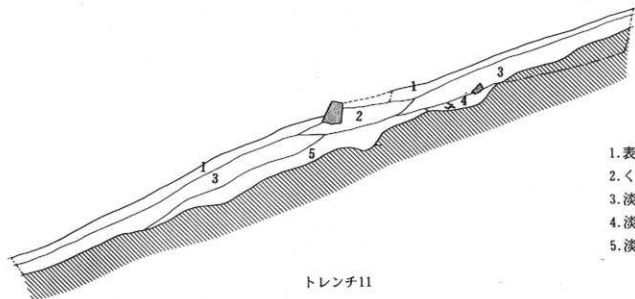


第4図 古墳部分地形測量及トレンチ配置図 (調査前)

B

33.50m

A



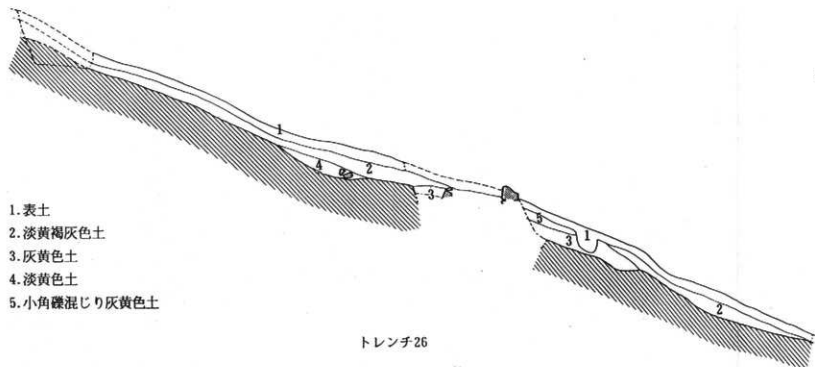
トレンチ11

1. 表土
2. くすんだ黄灰色土 (攪乱土)
3. 淡黄褐色土
4. 淡黄色土
5. 淡黄灰色土

D

33.50m

C



トレンチ26

1. 表土
2. 淡黄褐色土
3. 灰黄色土
4. 淡黄色土
5. 小角礫混じり灰黄色土



第5図 トレンチ土層断面図



調査地区全景（調査前）



調査地区全景（調査終了後）



伐開作業風景



トレンチ設定風景



発掘作業風景



発掘作業風景



2号墳検出状況



3号墳検出状況



1号墳（南から）



2号墳（南から）



3号墳（南から）



T-11土層（2号墳周溝部分）



T-6E土層（浅深盛土部分）



T-30（南から）



T-30土層 (浚深盛土部分)



T-30土層 (浚深盛土部分)

